ふるさとファイル

展示コーナーだより
第 57 号
平成 26 年 1 月
生涯学習課文化財係

西園寺公望の遺品

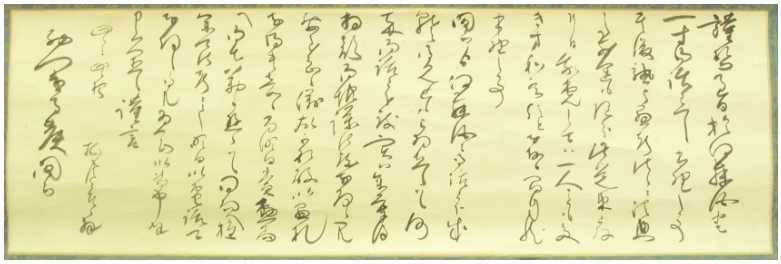
～清風荘の執事が伝えた書簡～

現物の展示期間（図書館休館日は除く）

資料①②
平成 26 年 1 月 7 日(火)～2 月 16 日(日)

資料③④
平成 26 年 2 月 18 日(火)～3 月 30 日(日)

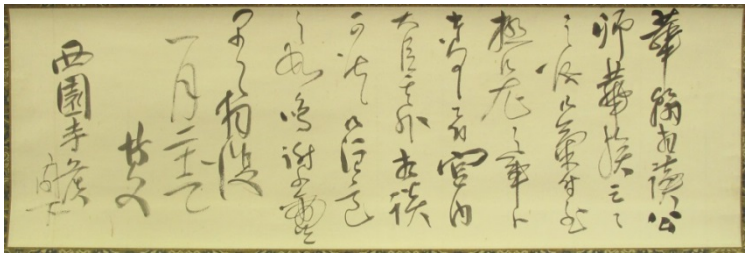
最近、長岡京市内で、明治末期から大正初期にかけて首相をつとめた西園寺公望宛ての書簡がまとまって発見されました。これらは、京都市左京区に今も残る公望の別邸「清風荘」の執事をつとめた神谷千二氏に譲られ、その御子孫が大切に保管していたものです。この貴重な書簡群から、各界の著名人と公望の知られざる関係について紹介します。



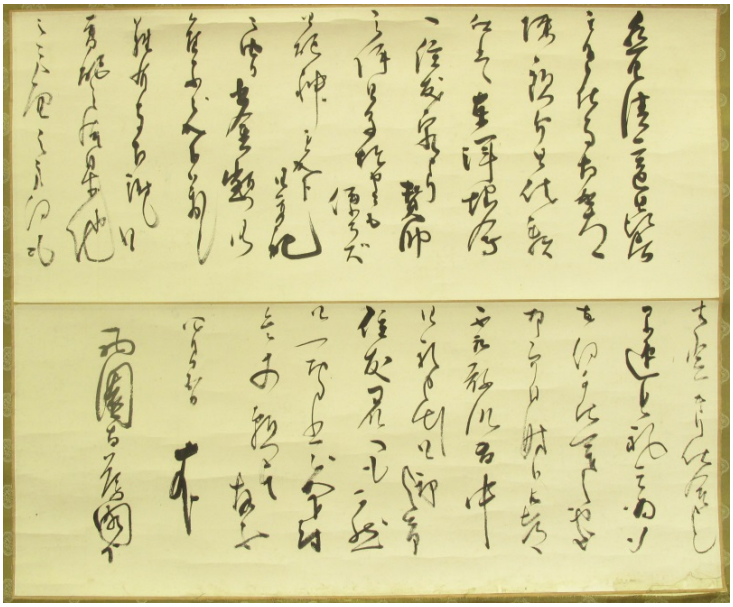
←① 梅謙次郎書簡　明治２６年（１８９３）

梅謙次郎は東京帝国大学教授の法学者で、明治２６年に内閣に設置された法典調査会の委員。発足したばかりの同会の今後の運営を危惧し、副総裁の公望に相談を持ちかけた書簡です。

→② 伊藤博文書簡　明治中期



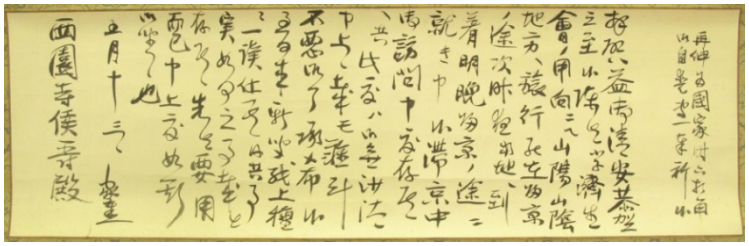
伊藤博文は当時首相で、法典調査会の総裁。法典を整備し、近代国家としての体裁をととのえることは、幕末に外国との間で結ばれた不平等条約を改正するうえで、必須の条件でした。この書簡では、公望から法典の文言について修正の指摘をうけたことに対して謝辞を述べています。



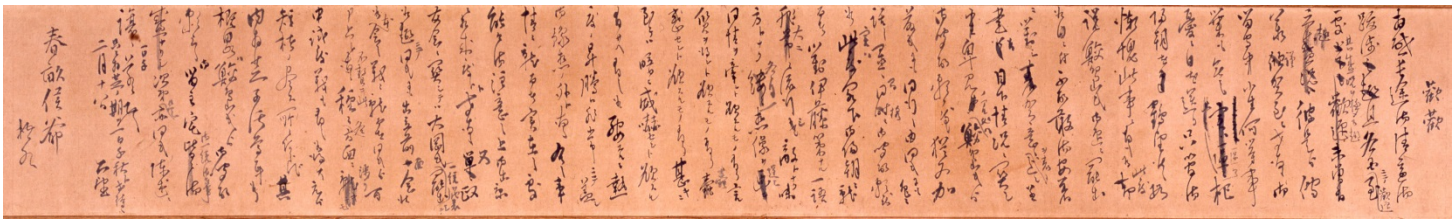
←③ 桂太郎書簡　明治４０年（１９０７）

前首相の桂太郎が、現首相の公望へ宛てた書簡です。当時は、桂と西園寺が交互に内閣を組閣する、桂園内閣の時代として知られています。桂は、公望を通じて住友財閥に対し、自身が設立した東洋協会への出資を依頼していました。桂はこの書簡で、公望の橋渡しで要請が実現したことを感謝しています。住友家当主の住友友純は公望の実弟で、二人はともに徳大寺家から養子に入っています。桂の要請は、その関係を頼ったものでした。

→④ 徳川家達書簡　大正３年（１９１４）



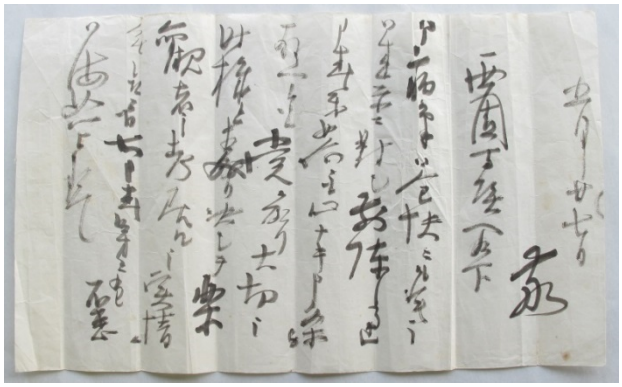
貴族院の議長で徳川家当主である家達（いえさと）の書簡。公望は病気を理由に立憲政友会（りっけんせいゆうかい）総裁の辞意を表明し、清風荘に隠棲（いんせい）していました。家達は中国地方での仕事帰りに京都の柊屋（ひいらぎや）旅館でこの手紙を記していますが、公望に面会する余裕がないことを謝っています。



↑⑤ 西園寺公望書簡の下書き　明治３５年（１９０２）

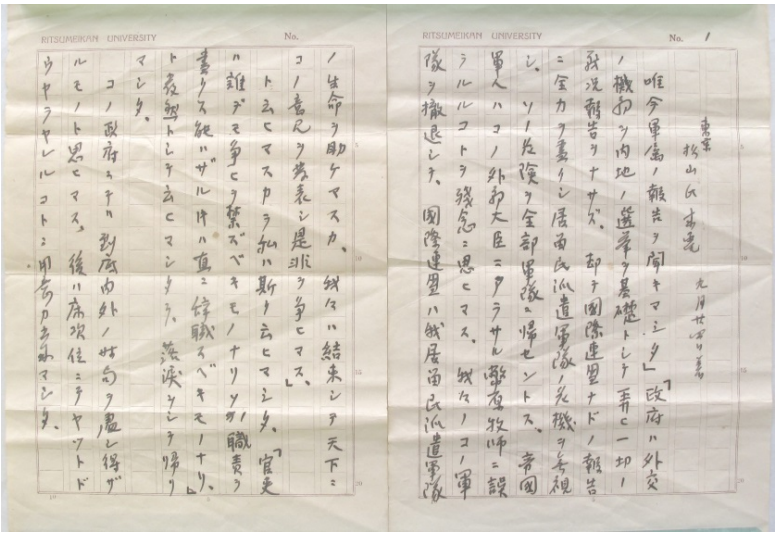
公望が伊藤博文に宛てて記した書簡の下書き。伊藤は日露協定の交渉のため、明治３４年９月に横浜を出港してアメリカ経由でロシアへ向かい、このときは交渉不成立のまま帰国を直前としていました。文章表現をめぐって推敲（すいこう）のあとが大変多くあることから、伊藤に対する細やかな気遣いが読み取れる書簡です。

←⑥ 原敬書簡　大正３年（１９１４）



④と同時期のものです。糊がはずれて、前半の本文が欠損し、追伸部分しか残されていません。家達が「過日以来、新聞紙上でいろいろと読んでいますが、事実はどうなのですか」と公望に尋ねているように、公望の去就をめぐる記事が当時の新聞を連日のようににぎわせています。清風荘には新聞記者が詰めかけているため、余計な詮索（せんさく）を避けて、家達もそして原敬（たかし）も清風荘は訪問しませんでした。そこで原は、この書簡を公望に送り、立憲政友会総裁に留まるよう求めています。

→⑦ 杉山茂丸の電文　昭和６年（１９３１）



政治運動家で、政界実力者に様々な献策をしていた杉山茂丸（しげまる）からの暗号電文を、公望の秘書で、当時立命館大学の総長を務めていた中川小十郎が翻訳筆記したものです。そのため「RITSUMEIKAN UNIVERSITY」と印刷された原稿用紙が利用されています。満州事変勃発直後のもので、幣原喜重郎（しでばらきじゅうろう）外相による国際協調路線のいわゆる幣原外交を批判する軍部の声が伝えられています。

参考文献：馬部隆弘「西園寺公望別邸清風荘の執事所蔵文書」（『ヒストリア』242 号、2014 年）
馬部隆弘「松江藩士神谷家の蒐集文書」（『史敏』通巻 11 号、2013 年）